# 月刊FALCOM MAGAZINE

Vol. 184



「理」で真面目になった公太子を
戻すのに必要なのはやっぱりあの人？
**も〜っと集まれ！ ファルコム学園**

**啄木鳥しんきのFalcom日和**

**ファルコムニュース**

**英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を**

新久保先生描き下ろし！
## 『空の軌跡 the 1st』ファンミーティング イベントレポート

執行者&お騒がせ一家のビジュアルが到着！
## 『空の軌跡 the 2nd』



FALCOM MAGAZINE

# CONTENTS

# 空の軌跡 the 2nd

ソラノキセキ ザ・セカンド



## 結社《身喰らう蛇》のエージェント《執行者》のビジュアルが続々到着！さらに前作でも大活躍（？）なお騒がせ一家も登場!!

2025年に「軌跡」生誕20周年記念として完全フルリメイクされた『空の軌跡 the 1st』。その続編となる『the 2nd』。今号では、謎の結社《身喰らう蛇》に序属するエージェント・執行者の姿が明らかに。また、前作に登場した“お騒がせ一家”の情報も到着した！

『空の軌跡 the 2nd』公式サイト
**https://www.falcom.co.jp/sora2/**

**空の軌跡 the 2nd**

**●ジャンル**：ストーリーRPG
**●対応機種**：Nintendo Switch 2、Nintendo Switch、PlayStation 5、Steam
**●発売時期**：2026年9月17日
**●販売価格**
**【パッケージ版】**通常版：8,800円　Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
ウロボロスBOX：13,860円
Nintendo Switch 2 Edition ウロボロスBOX：13,860円
**【ダウンロード版】**通常版：8,800円
Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
Nintendo Switch 2 Edition アップグレードパス：150円
デジタルデラックス版：12,650円　シーズンパス：4,180円

※価格はすべて税込です





## 《道化師》カンパネルラ

（CV：伊藤かな恵）

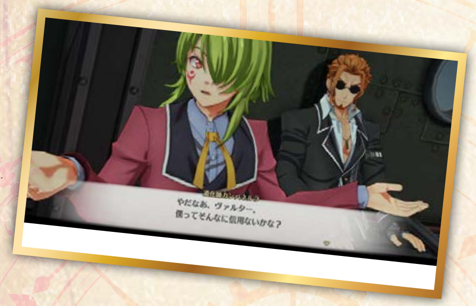
**年齢：?? 歳**

結社《身喰らう蛇》に所属する執行者の一人で、10代の少年のような外見をしているが年齢は不明。
No.0という特殊なナンバーを与えられており、《白面》ワイスマンが実行する計画の見届け役として結社から派遣された。
炎による幻術で姿を現したかと思えば人を食った思わせぶりな台詞を残して消え去ってしまうなどその行動は神出鬼没。



「これにて今宵のショウはおしまいさ。それでは皆様、ご機嫌よう。」









# 《怪盗紳士》ブルブラン

（CV：谷山紀章）

「美しい…!そうだ、これこそが我が盗むにふさわしき“美”…!」

**年齢：29 歳**

《怪盗紳士》の異名を持つ執行者No.X。
「怪盗B」の名で大陸諸国の大都市を中心に暗躍しており、「美とは気高さ、遥か高みで輝くこと」という己の美学を実践するため結社に身を置いている。
芝居がかった言動と合わせ、トリッキーな技を駆使して敵を翻弄する戦法を得意としている。



# 《痩せ狼》ヴァルター

（CV：吉水孝宏）

「クク、てめぇの喰い応えがどの程度か確かめてやるよ。」

**年齢：31 歳**

大陸各地の武術を取り込み、人の命を奪うための“殺人拳”を完成させた武術家にして《痩せ狼》の異名を持つ執行者 No. Ⅷ。
獰猛かつ残忍な性格で、勝負となれば女子供が相手でも一切の容赦がない。
共和国の遊撃士ジンが修める東方三大拳法の一つ《泰斗流》と何らかの関わりがあるようだが……。









# 《幻惑の鈴》ルシオラ

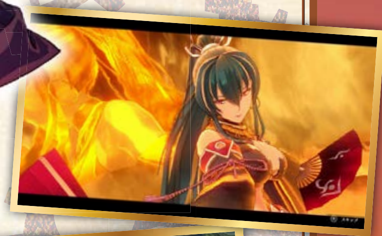
（CV：柚木涼香）

「さぁ、来なさい……素敵な夢に溺れさせてあげる。」

**年齢：27歳**

妖艶な出で立ちと一対の扇が印象的な結社《身喰らう蛇》に所属する執行者 No. VI。
《幻惑の鈴》の異名通り、鈴を用いた幻術と戦闘用の扇による多彩な乱舞攻撃を得意としている。
他の執行者たちと異なり、何らかの個人的な目的があってリベール王国を訪れたらしい。












# ジョゼット・カプア

（CV：永瀬アンナ）

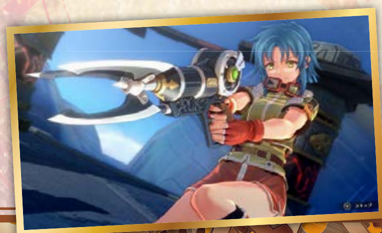
「か、可愛くないヤツ！人がせっかく心配して探しに来てやったのにさ！」

**年齢：16歳**

《カプアー家》三兄妹の末っ子で、導力銃とアーツを使いこなす空賊団の紅一点。
ボーイッシュで勝気な性格をしているが空賊団の家事全般を担うしっかり者でもあり、団員からは「お嬢」と慕われている。
エステルとは性格的にそりが合わないらしく、出会う度に「ノー天気女」「ボクっ子」と反発し合う仲。







# キール・カプア

（CV：田丸篤志）

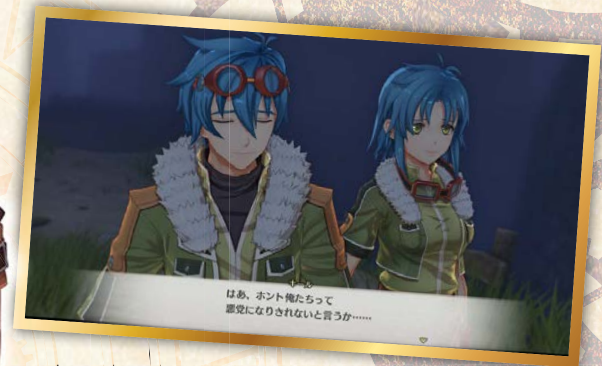


「あんまー人で先行するなよ？
一応ビジネスパートナーなんだからな。」

**年齢：23歳**

《カプア一家》三兄妹の次男で、空賊艇の操舵主を担当している青年。
機動性の高い《山猫号》を抜群の操縦センスで乗りこなすほか、頭が切れるため空賊団の作戦行動を立案することも多い。
ジョゼットの意志を尊重しつつも、実の妹が空賊団に身を置いていることに関しては内心複雑な思いを抱いている様子。









# ドルン・カプア

（CV：丹沢晃之）

「せいぜい俺たちの方も
おめぇを利用させてもらうぜ。」



**年齢：30歳**

空賊団の首領を務める《カプア一家》の長男。
何者かに操られてリベール王国で空賊事件（the 1st）を引き起こしたが、元は単純豪快で家族想い・仲間想いの人物。
団員たちとともに囚われの身となっていたがリベール王国を襲ったとある出来事の最中、どさくさに紛れて脱獄し、姿を消してしまった。













# クイックバトル時の新システム「ブレイブラッシュ」と執行者のみが発動できる「レギオンブースト」とは!?

## ブレイブラッシュ

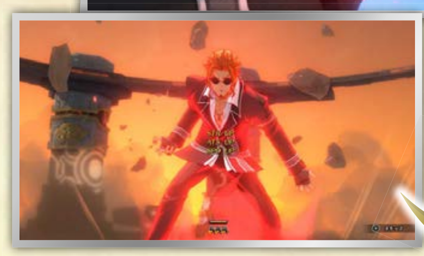
前作から引き続き、今作もフィールド上のアクションで敵を攻撃できる「クイックバトル」と、ターン毎にコマンドを駆使して戦う「コマンドバトル」の２タイプのバトルシステムとなっている。そして、今回はその「クイックバトル」にも新たな要素「ブレイブラッシュ」が追加された。「ブレイブラッシュ」は、クイックバトル中にブレイブゲージ２本を消費することで発動することができる特殊攻撃。操作キャラと仲間キャラの連携による、広範囲かつ高威力の特殊攻撃なので、積極的に使っていこう。











## レギオンブースト

前作でも一部の強敵やボスキャラが使用してきた「レイジブースト」。強力な攻撃の連発で、苦戦したプレイヤーも多いはず。今回新たに登場する、結社《身喰らう蛇》に所属する敵キャラ執行者（レギオン）には、「レイジブースト」をさらに上回る「レギオンブースト」が存在することがわかった。発動すると戦闘フィールドの見た目が変化するほか、通常の「レイジブースト」よりも長時間ブースト状態が持続するので、対策して戦闘に臨もう。



★「スチャラカ」って幕末に生まれた言葉だそうですよ★




## ストレートな評価




## 部下の鑑



## ストレートな評価その2




## オリビエのいるところ




## スチャラカな演奏家




## 裸の皇子さま



## 殿下の戦闘術




## 護衛のプライド




## 期待していたセリフ




## 準備する一行



# 夢にまで見た会見




# 否定する皇子




# スチャラカへの切り札




# 運命の一夜



# 爆誕！第3の男




# ともに味わうために




# 絶望の護衛秘書




# 継承するものとされるもの






◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks




発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら ⟶ www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら ⟶ www.field-y.co.jp/falcombooks

◉なんとなく流れで描くことになった、A久保Dすけセンセイのレポマンはじまるよ!◉







【空の軌跡 the 2ndファンミーティングに続く!?】

# ▶ファルコムニュース◀

**ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！**

## フィギュア『POP UP PARADE レン』予約開始！

グッドスマイルカンパニーさんより、「POP UP PARADE 空の軌跡 the 2nd レン L size」の予約受付がスタートしました。





■商品名
POP UP PARADE レン L size
■予約期間
5月22日(金)～6月17日(水)
■発送時期
2026年11月予定
■価格
9,800円
■メーカー
グッドスマイルカンパニー

| グッドスマイルカンパニー公式ショップURL |
| --- |
| https://www.goodsmile.com/ja/product/56501/ |

## 「風ザナ&ぽっぷるメイル」グッズ通販開始！

日本最大級のインディーゲームの祭典 <BIT SUMMIT PUNCH@京都>にて販売された「風の伝説ザナドゥ」「ぽっぷるメイル」の最新グッズがアウリンONLINE SHOPにて2026年6月1日(月)より、取扱い開始となります。

| アウリンONLINE SHOP |
| --- |
| https://auryn.theshop.jp/ |



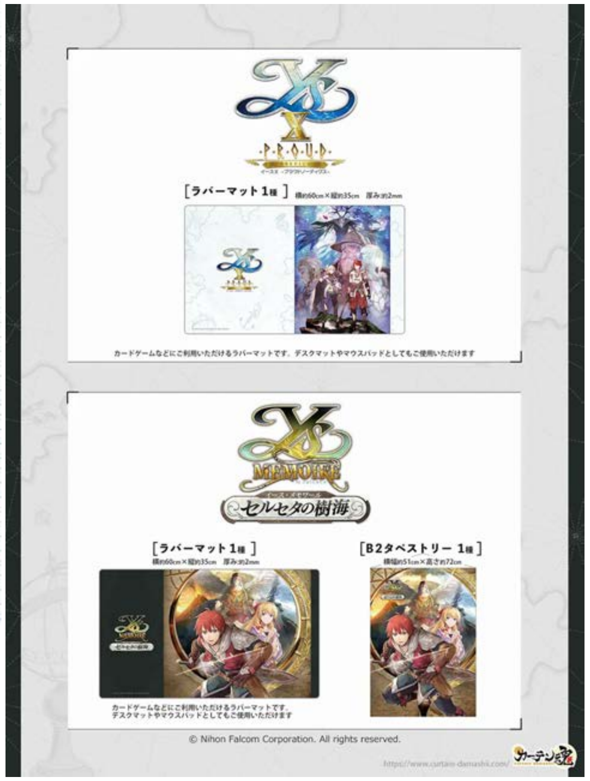




## 「空の軌跡1st」「イース」新商品登場！

カーテン魂さんより、「空の軌跡 the 1st」「イースX -Proud NORDICS-」「イース・メモワール セルセタの樹海」の新商品が登場。「空の軌跡 the 1st」のアクリルブロック8種、アクリルパネルスタンド2種は期間限定販売商品です。どうぞお見逃しなく！



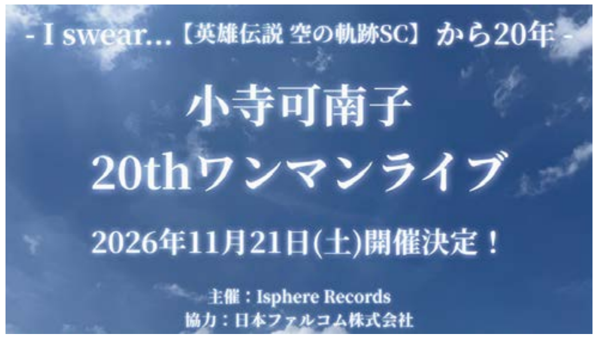




■受注期間：
5月15日(金)～6月15日(月)

| カーテン魂URL | https://curtain-damashii.com/item/tag/falcom/ |
| --- | --- |

## 小寺可南子20thワンマンライブ開催決定

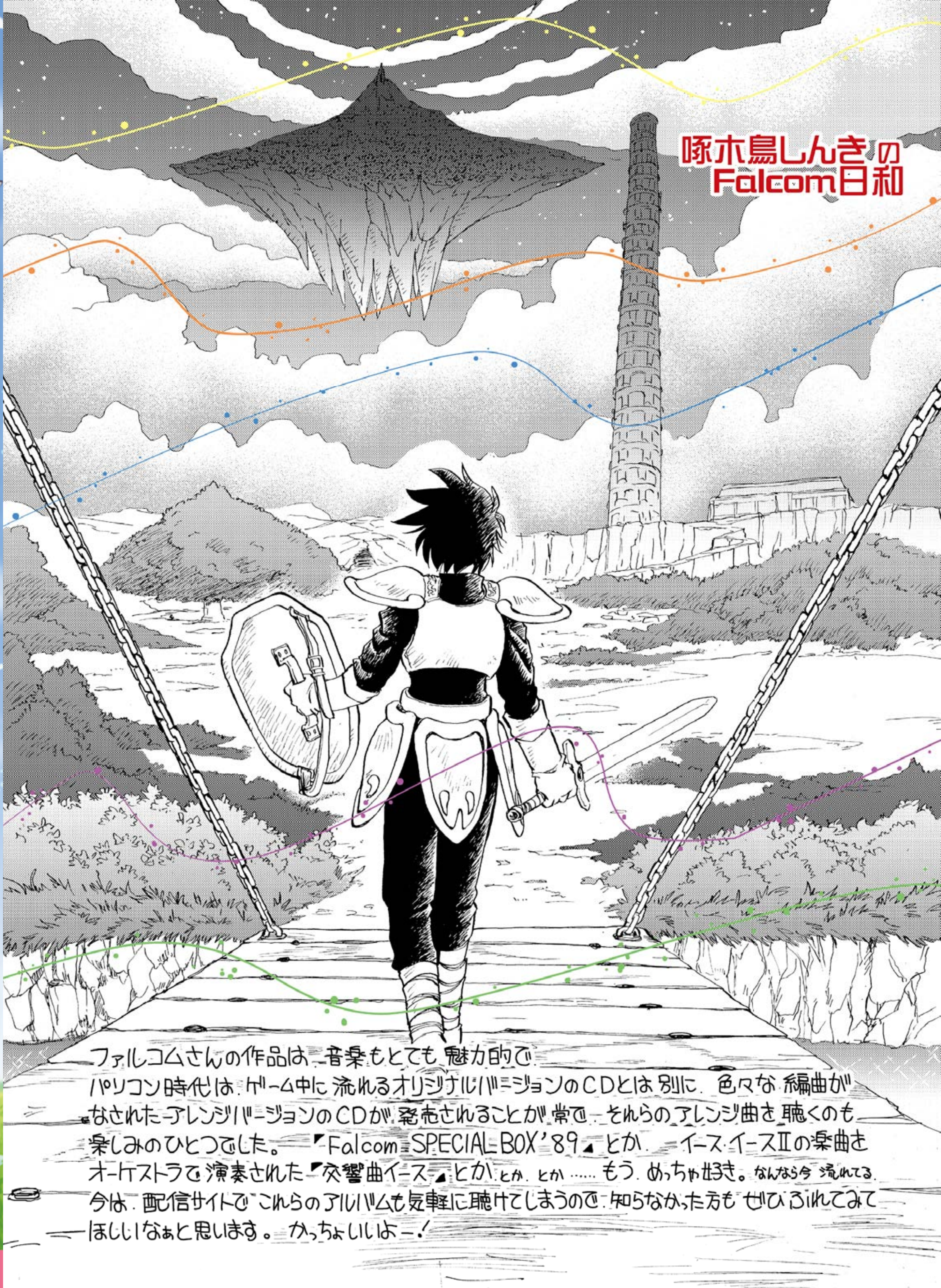
I swear…「英雄伝説 空の軌跡SC」から20年ーファルコムjdkバンドで長年ボーカルを担当されていた 小寺可南子さんのデビュー20周年記念ワンマンライブが開催されることが決定しました。ライブでは、ファルコムjdkバンド時代の楽曲も歌唱されます。続報をお楽しみに！




■開催日：2026年11月21日(土)
■主催：Isphere Records
■協力：日本ファルコム株式会社

| Isphere Records公式サイト | https://isphererecords.com/archives/1056 |
| --- | --- |


“輝く環”を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。
かつて兄と弟のように育ったレーヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える！
空の軌跡、ここに完結！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑦
啄木鳥しんき
定価：1,210円（本体1,100円＋税） ISBN 978-4-8021-3516-0
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
www.field-y.co.jp


啄木鳥しんきの
Falcom日和
ファルコムさんの作品は、音楽もとても魅力的で
パソコン時代は、ゲーム中に流れるオリジナルバージョンのCDとは別に、色々な編曲が
なされたアレンジバージョンのCDが発売されることが常で、それらのアレンジ曲を聴くのも
楽しみのひとつでした。『Falcom SPECIAL BOX'89』とか、イース・イースⅡの楽曲を
オーケストラで演奏された『交響曲イース』とか、とか、とか……もう、めっちゃ好き。なんなら今流れてる。
今は、配信サイトでこれらのアルバムも気軽に聴けてしまうので、知らなかった方もぜひふれてみて
ほしいなぁと思います。かっちょいいよー！

# 第1話

# 『ランディのプレゼント』



# 英雄伝説 碧の軌跡

## ～いつか貴方とお茶会を～

第1回

**特務支援課のゆる～い(?)日常第2弾！**

**意外なキャラクターたちも続々登場！**






エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。その主人公を務めるロイド・バニングスら特務支援課メンバーと、彼らとともに壁を乗り越え続けた仲間たちの「あったかもしれない」ゆる～い日常の日々を描いた外伝小説の第２巻！「あのキャラとあのキャラが!?」と思わずにはいられない意外な組み合わせも続々登場の一冊をご堪能あれ！

**製品情報**

好評発売中

著　　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　　価：1,210円（税込）

ゼムリア大陸西部にある自治州クロスベル。
エレボニア帝国とカルバード共和国という二大勢力に夾まれた都は、経済の発展とともに、犯罪組織の台頭や諜報謀略の温床といった闇の面も色濃くなり、さまざまな事件が起きていた。
クロスベル警察に新設された特務支援課に所属する面々は、微力ながらも人々の要請に応え、日々、信念を旨として街の平和のために職務に励むのだった。

しかし、人はパンのみにて生きるにあらず。紅茶にお砂糖も必要なのだ。

「え〜っと……あと買ってないのは……」
ブラウンの髪の青年がメモを見ながらカゴに商品を入れていく。
捜査官ロイド・バニングスは、つかの間の昼休みに、仲間たちと百貨店《タイムズ》まで買い出しに来ていた。
昼時だけに、一階の食料品売り場は、とくに賑わっている。
「ロイド、ちょっといい？」
「ん？　なんだい？」
話しかけてきたのは、エリィ・マクダエル。パールグレイの髪を腰まで伸ばした美しい少女である。



前市長の孫娘で、射撃の名手。政界入りを嘱望された才媛だが、故あって警察官になっている。
「厚切りベーコンが特売らしいの。夕飯は炒め物なんてどうかしら？」
「ああ、いいね」
「じゃあ、買っておくわね」
やわらかい笑みを残してエリィは店の奥に向かった。
メモに書かれている物を探して、ロイドは別の方向へ。
ふと、ぬいぐるみやグッズのコーナーに目を向けると子どもたちに混じって、仲間の姿があった。
猫耳のような形の髪飾り（センサー）を頭に乗せた、ライトブルーの髪の少女が、真剣な表情をして商品棚を見つめている。
「こ、これは……限定色のみっしぃキーホルダー!?　しかし、同じ物の通常版は持っているわけですし、限られた予算を有効に活用するために、ここは自重すべきかと。で、でも、今、これを逃せば永遠に入手は不可能です……」
少女は名をティオ・プラトーといい、エプスタイン財団から支援課に出向している。
導力技術に精通し、超常の知覚力を持ち、十四歳とは思えないクールな言動をするのだが、みっしぃというマスコットキャラクターが大好きという子どもらしい面もあった。語り出すと






止まらないほどだ。
　う～ん、と悩んでいるティオに声をかける。
「どうしたんだ？」
「ハッ⁉　ロイドさん……すみません、お買い物を任せてしまって」
「気にしなくていいよ。俺は見たいものがあるわけじゃないし。ティオ、なにか困ってるみたいじゃなかったか？」
　少女が頬を赤らめる。
「……お恥ずかしいところを見られてしまいました」
「いや、そんなことないけど」
　いつものクールな表情でティオが話す。
「色が違えば受ける印象は異なるわけですから、いわば別物。同じ形の通常版を持っていることとは関係なく、これは限定グッズと考えられます。すなわち、購入するのになんら迷う余地などありませんでした。躊躇するとは、お恥ずかしいかぎりです」
「あ、ああ……そういう意味だったのか」
　ロイドは苦笑する。
　ティオが丁寧にみっしぃキーホルダーを手にして、会計へと向かった。
　その後、必要なものをカゴに入れたロイドも、支払いのためにレジの列に並ぶ。

小さな女の子が走ってきた。
カゴが当たらないように持ち上げる。
ロイドの腹に、ライムグリーンの髪の幼い女の子が、体当たりしてきた。
どしんっ、と受け止める。
「おっと……いいタックルだな、キーア。でも、店内で走ったら危ないぞ」
「わかった。ロイド！　これ、買って！」
特務支援課で保護している女の子、キーアだった。
過去にいろいろあって、今はロイドたちが親代わりをしている。
しゃがんで目の高さを合わせた。
「どれどれ？」
「これ」
キーアが持ってきたのは、犬の首輪だった。
「ツァイト用か？」
「うん！」
支援課には、この地方の伝説にある白狼がいる。ツァイトといって、ロイドたちメンバーを助けてくれている仲間だ。
対外的には警察犬だと言い張っているが。
「なるほど、いいかもしれないな」
誰に需要があるのか謎だが、プレートに《POLICE DOG》と書かれていた。
「えへへっ」
「せっかくだし、プレゼント包装ができるか訊いてみるよ」
「やった！　ロイド、ありがとー！」
「いいさ。キーアもツァイトも俺たちの大切な仲間だからな」
頭をなでてやると、キーアがくすぐったそうに目を細めた。
会計を済ませる。
ロイドは他のメンバーたちを探した。
エリィとティオは百貨店の入り口のあたりでおしゃべりして待っている。
キーアを預け、もうひとりを探しに歩いた。
もしかしたら二階だろうか？　と階段のほうへ向かったところ、赤毛で長身の青年を見つけた。
ランディ・オルランド。
元々は警備隊に所属していたが、素行不良でクビになりかけたところを特務支援課に引き取られた……と聞いているけれども、いろいろと事情がありそうだ。
「おーい、ラ……」

名前を呼びかけたロイドだったが、口を閉じた。
商品棚もない隅のほうで、何をしているのかと思えば、ちょうど通信を受けたところだったらしい。
手にしたエニグマ──多様な機能を持った第５世代戦術オーブメント。通信機能も備えている──を耳へと当てている。
「おう、俺だ……ひさしぶりだな、元気か？　……ああ、したぞ、昨日の夜……」
通信中らしい。
そう長くもならないだろうから、ロイドは待つことにした。

ほんの少し前──
クロスベル自治州の西端に位置するベルガード門。
その一角、導力通信機の置かれた部屋だった。私用の通信は、ここを使う規則となっている。
現在の利用者はひとり。
ミレイユ三尉は何度目かの深呼吸をした。



ウェーブのかかった金色の髪をかきあげて、見られるわけでもないのに服装を整える。
なんてことないはずなのに、無駄に緊張してしまっていた。
わずかに震える手で、壁掛けの通信機の受話器を取る。
暗記している番号を入力した。
数回のコールで、通信がつながる。耳に当てた受話器から、青年の声が流れてきた。
『おう、俺だ』
「ッ‼　ランディ……あたしよ、ミレイユ」
『ひさしぶりだな、元気か？』
「まあまあね。あなた、昨日、連絡してきたでしょ？」
『ああ、したぞ、昨日の夜』
「タイミングが悪いわね。ちょうど偵察任務中だったから門を出ていたの」
『そうらしいな。まぁ、急ぐ用事じゃないからいいんだけどさ』
「ふーん、言ってみたら？　その急がない用事っての」
とても気になりつつも、照れくさくて気のない訊き方をしてしまう。
『ちょっと前に支援課でミシュラムに行ったんだ』
ランディが苦笑したのが聞こえてくる。見透かされているようで頬が熱くなった。
「ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）？」

『ああ、新しくオープンするビーチのほうも見せてもらったが、なかなか悪くなかったぞ』
「みんなで、行ったんだ？」
『ロイドたちとな』
「いいなぁ……あ……いえ、休暇がうらやましいって意味だからね!?」
『はいはい』
ミレイユはＭＷＬに行ったことがなかった。べつに休暇がまったくないわけではないが、一緒に行くような親しい友人がいないし、ひとりで行くのは恥ずかしい気がする。
「それがどうかしたの？」
『みやげ話だけじゃなんだから、ちょっと渡そうと思ってる物があってよ。近いうちにメシでも食べないか？』
「え……メシって……物って……？」
『ああ、いや、そんな大層な物じゃないぞ。昇進祝いってやつだ』
すこし前に、ミレイユは准尉から三尉になっている。
とある事件により、警備隊の人手が足りなくなったせいだと思うが。
「………今日？」
『え？　いや、今日でもいいけど。急だな』
「そ、そうかしら？　でも、ちょうど任務あけで、明日の朝までオフで、次はいつ休めるかわからないし、べつにどうしてもってわけじゃないけど」
『俺のほうは非番じゃないんだよな。今は昼休みだが……』
そういえば、通信機の向こうから人の声が聞こえている。外にいるのかもしれない。
『……まぁいいか。夕方にはあがれるだろうし、市内（クロスベル）でディナーでもどうだ？』
「ッ!?　ディナー!?　う、う、うん、かまわないわよ。どこに行くのか知らないけど」
『屋台で天上麺なんていいんじゃないか？　俺のイチオシ』
「……え……？」
べつに屋台がキライなわけではないが、ディナーという言葉の響きからは遠いような気がした。
でも、本気でオススメしているなら、断るのは申し訳ない。
どうしよう？
ミレイユが悩んでいると、ランディが笑いだした。
『はは……冗談だ。まだ夜までに時間あるし、ちゃんとした店を押さえておくって。楽しみにしとけ』
「ば、ばか。変なトコだったら承知しないんだからね!?」
またからかわれた。こういうところがランディは他の人たちと違うと思う。
ミレイユは若くして三尉という地位にある。警備隊の面々は敬意を払ってくれるが、そのぶ

ん気安く接してくる者はいなかった。
　女性として扱われることに慣れていないから、どうしたらいいかわからなくて、つい強く返してしまう。
　素直な子のほうがかわいいんだろうなぁ……とは思いつつも。
『まぁ、店は任せてくれ。待ち合わせは、今夜の七時にアルカンシェルの前でどうだ？』
「うん……了解。本日十九時（ヒトキュウマルマル）に繁華街エリアのアルカンシェル劇場前で」
『お、おう。武装はしてくるなよ？　レストランに入れなくなるぞ』
「うっ……し、失礼ね。いつもどおりで行くわよ」
『オーケー。オシャレしてこい。じゃあ、そろそろ昼休みが終わっちまうからよ』
「うん」
　音が消える。通信が終了した。
　ミレイユは受話器を戻しながら、機械にしがみつく。膝から力が抜けそう。
「約束……しちゃった……」
　ディナーの。
　ランディと食事をするのが初めてというわけではない。彼が警備隊にいた頃は、訓練のあと、よく一緒に食堂へ行ったものだし。野戦食だって一緒に取ったし。
　でも、今回のは、そういうのとは違うと思う。空腹を満たして体力を回復させるための食事ではない。
　繁華街である。予約して。レストランだなんて。
　しかも、オシャレを。
　これは世に言う《デート》というミッションではないだろうか!?　たぶん、きっと。
　ふ、ふふ、ふふふ……と口元が緩んでしまう。
　ハッ!?　とミレイユは我に返った。
「ちょっと!?　どうして、私が喜んじゃってるわけ？　ランディのことだから大した意味なんかないわよ。あいつは毎日のように他の子ともデートしてるんでしょうし！　わ、渡したい物があるって言うから受け取りに行くだけのことよ！」
「あ〜、ミレイユ三尉……？」
「ひゃっ!?」
　いつの間にか後ろで待っていた壮年の隊員に声をかけられ、飛び上がった。
「……そろそろ通信機を使わせてもらえませんかな？」
「し、失礼しました！」
　あわてて部屋を出るのだった。

ふたたび、百貨店――

ロイドは通信を終えたランディに声をかける。

「やあ、そろそろ行こうか？」

「おっと。なんだよ、聞いてたのか？」

「それほど聞こえてはいなかったけど……ミレイユ三尉だろう？」

「ああ、元気にやってるみたいだ」

「そうか」

入り口のほうへ向かおうとすると、ちょうど緑色の髪をした細身の青年が歩いてきた。

ワジ・ヘミスフィアだ。

テスタメンツという不良グループのリーダーだが、先日、なにを思ったか支援課に志願してきた。今は臨時の準メンバーとなっている。

「ちょっといいかい？　ロイド、ランディ」

「結局、ワジも来たのか」

支援課ビルでくつろいでいるはずだったのに、とロイドが言うと。

「急な支援要請があったからね。ノエルも外で待ってるよ」

「なんだって!?」

ロイドは緊張を高めた。

ランディの表情も、いつものにやけ顔から、ひきしまったものに変わる。

「わざわざ呼びに来るなんざ、よっぽどの急ぎか？」

「全員が揃ったら現地に向かいながら話すよ」

ワジが入り口のほうへと向かう。

ロイドはランディと共にならんで追いかけた。

百貨店の外に出る。

店の前に、支援課の導力車が待っていた。

エリィたちは、もう乗りこんでいる。

運転席側の窓からモスグリーンの帽子をかぶった少女が、手を振った。

「ロイドさん、こっちです！」

「ああ！」

ノエル・シーカー曹長は警備隊に所属しているが、現在は、特務支援課に出向している。

　武器の扱いだけでなく、運転技術も優れているため、たいてい導力車のハンドルは彼女が握っていた。

　とある事件を解決したご褒美……というわけでもないだろうが、支援課にも導力車が支給されたのだ。それだけ期待されているということだろう。

　急いでいる状況では、とくに助かる。

　今のように。

　すでに状況を把握しているノエルがクルマを発進させる。

　支援課メンバー六名と、キーアが乗っているのを確認して、ロイドはうなずいた。

「ワジ、状況を説明してくれ」

「ｊａ（ヤー）．先ほど、支援課ビルに直接、クロスベル国際銀行（ＩＢＣ）から支援要請があった。連絡してきたのは、あのマリアベル嬢だよ」

「ベルが……」

　つぶやいたのは、エリィだった。

　マリアベル・クロイスはＩＢＣ総裁の娘で、父親が新市長になったため、ＩＢＣの事業運営を一手に引き受けている。エリィとは幼馴染みで親友の間柄だ。困っているなら手助けしたいと思うのは当然だろう。

　ワジが説明を続ける。



「ＩＢＣに来てくれという話でね。大事件というわけではないけど、急ぎの要件らしいよ」

「詳しくは現地で、というわけか」

「僕とノエルだけでもよさそうだったけど、ＩＢＣに行くなら、百貨店は途中だからね」

「合流できてよかったよ。なにかあっても導力車がないと、すぐには駆けつけられないしな」

　ロイドの言葉に、ワジが微笑んだ。

　運転席からノエルが声をかけてくる。

「はい！　到着しました」

　ＩＢＣ玄関前にクルマをつけて、ロイドたちは外へ出る。

「あたしはキーアちゃんと待ってますね」

「ありがとう、ノエル」

　大きな玄関扉をくぐって、ロビーに入る。

　あいかわらず広い。

　エレベータホールのソファ前にふたり。金髪をくるくる巻いた髪型のマリアベルと、壮年の

男性がいた。
　ロイドたちは駆け寄って尋ねる。
「どうしましたか⁉」
　安堵したような笑みをマリアベルが浮かべた。
「お待ちしていましたわ」
「おお、あなた方が特務支援課ですか⁉」
「ええ」
　壮年の男性が、祈るように手を合わせる。
「私はクロスベルの郊外で工場を経営している者です。今日は工員たちのボーナスを引き落としに来たんですが……そのミラを入れたカバンを持って行かれてしまって……」
「なんですって⁉」
　ロイドだけでなく、他の支援課メンバーたちも驚いていた。
「それは、大変お困りでしょうね……」
　エリィが言えば、ティオがうなずいて。
「……事件です」
「置き引きってやつか？」
　とランディ。



　ワジが肩をすくめた。
「でも、ＩＢＣなら防犯カメラがあるんじゃない？」
「そのとおりです」
　マリアベルが銀色のアタッシュケースを出した。
「持って行ったのは、うちと何度も取引のある顧客で共和国の方ですの。身元の確かな紳士ですし、防犯カメラの映像によると、どうやら似たようなアタッシュケースだったので間違えてしまったようですわね」
　事件といえば事件だが、手違いによるトラブルだったらしい。
「つまり、そのマリアベルさんの持っているのが、間違えて持って行ってしまった紳士の、本来の持ち物ということですか？」
　ロイドが確認すると、彼女がアタッシュケースを渡してきた。
「そういうことです。ロイドさん、悪いですが、この荷物、届けてくださらないかしら？　この時間なら、まだタングラム門は出ていません。あちらは今日の夜までに、その書類を持って国に戻らなければいけないハズですの。そして、こちらの社長さんも……」
「お願いします！　今日の終業時間までにミラがないと、ボーナスが払えません！」
「わかりました。すぐにタングラム門に向かいます。全力を尽くすので待っていてください」
　深々と頭をさげる社長に、ロイドは力強い言葉をかけ、仲間たちを外へとうながす。

状況が状況なのでマリアベルとエリィに個人的な会話はなかったが、互いに視線を交わしていた。

ＩＢＣを出ると、もう導力車が外へ向いて待っていた。

ロイドたちはクルマに乗りこむ。

「どこに行きますか？」

尋ねてきたノエルに答える。

「タングラム門へ！　急いでくれ！」

「おやすいご用です！」

言うなり、導力エンジンがうなりをあげた。

キュッと小さくタイヤを鳴らして、発進する。

「フフ……安全運転で頼むよ？」

ワジの言葉に「もちろん」とノエルは返したが、いつもよりはスピードが速い。

「キーア、しっかり掴まってください」

「うん！」

ひとつのシートをふたりで使うティオとキーアが、お互いに掴まり合う。シートベルトもあるし、大丈夫だとは思うが。

ロイドは預かり物のアタッシュケースを、しっかりと両腕で抱えるのだった。



タングラム門――

導力車が到着すると、今度はワジが残るという。

「ここはノエルのほうが詳しいだろ？　僕がキーアと待ってるよ」

「わかった」

ロイドはアタッシュケースを持ってクルマを降りる。

キーアが申し訳なさそうにして。

「ごめんね、ワジ」

「いいさ。こういう堅苦しい場所は苦手だしね。百貨店には、なにか面白いものが売ってたかい？」

「うん、ツァイトの首輪を買ってもらったの！」

「なるほど、それはきっと喜ぶだろうね。何色にしたんだい？」
導力車のなかでお話ししているワジとキーアを残し、ロイドたちはタングラム門へと向かった。
ゲートの左側にあるカウンターにいる隊員に話しかける。
ここは、ノエルに任せることにした。
「おつかれさまです、オリバー隊員」
「おや、ノエル曹長じゃありませんか。おつかれさまです。今日は支援課の任務ですか？」
「はい。通行者リストを調べて欲しいのですが……」
ノエルから、探している相手の名前を伝えてもらう。
オリバー隊員がなにか思い当たったらしい。
「あ、その人なら、別室にいますよ」
「え？　なにかあったんですか？」
「申請なしに大きな額のミラを持ち出そうとしたので、取り調べ中です」
「あっ、なるほど」
犯罪防止や関税のため、高額なミラや物品を持ち出すには申告と身分証明が必要となっている。
中身は書類だと思っていたアタッシュケースに、たくさんミラが入っていたら、取り調べとなるのも当然だろう。
ロイドたちが別室に行ってみると――
予想通り、困惑した様子の紳士が、冷や汗を流していた。
「本当に知らないんです。どうして私のカバンに、こんなにミラが……しかも大切な書類はなくなっているし……」
「うーん、そう言われても困ったであります」
弱り顔の警備隊員にノエルが声をかける。
「ちょっといいですか、ジャック隊員」
「ん？　あっ、ノエル曹長！　おひさしぶりであります！」
「おひさしぶりです。こちらの紳士の身分証明と、そのミラの入ったアタッシュケースの引き取りに来ました」
「えっ!?」
驚いた顔をするジャック隊員と紳士に、ロイドのほうから事の顛末を説明した。
「――というわけで、そのミラの入ったアタッシュケースが、とある工場の社長さんの物であることは間違いないと思います」

「そ、そうだったのか！　ああ、私は、なんという間違いをしてしまったのか……」
　紳士が頭をかかえる。
　ジャック隊員は胸をなでおろした。
「なんにしても、ミラの持ち主もわかったし、この人の身分もはっきりしたから、よかったでありますの」
「アタッシュケースが戻れば、とくに問題にはしないとのことですから」
　落ち込んでいる紳士をエリィが元気づける。
　ランディはミラの入ったアタッシュケースを預かり、口笛を吹いた。
「たんなる書類が、こいつに化けたら、たしかに驚くだろうな」
「念のため、数えさせていただきます」
　ティオの言葉に紳士がうなずいた。
　ロイドは懐からエニグマを出し、状況をマリアベルに報告することにした。
　ＩＢＣの受付を経て、彼女へと繋いでもらう。
『おつかれさま、ロイドさん。追いつくことはできたかしら？』
「はい。今、ミラを確認しているところです」
『さすがは支援課ですわね。いつもながら手際がよくて助かります』
　問題なくすべてのミラがあることを確かめてから、ロイドは書類の入ったアタッシュケースを紳士へ手渡した。
　彼は深々と礼をする。
「その社長さんには、後日、改めて謝罪に伺わせていただきます」
「伝えておきます。道中、お気をつけて」
　紳士はタングラム門のゲートをくぐり、共和国へと帰っていった。
　今度はミラの入ったアタッシュケースを抱えて、ロイドたちはＩＢＣへと戻る。
　何度もお礼を言う社長を見送り、マリアベルからも感謝され、ようやく、ひとつの支援要請を達成した。
　ＩＢＣを出たところで、エニグマに通信が入る。
「はい、こちら、ロイド」
『あ、フランです』
「やあ、どうかしたのかい？」
　フラン・シーカーは警察本部のオペレーターを勤める女性警察官だ。ノエルの妹でもある。
『鉱山町マインツから、緊急の支援要請が入りまして。行けそうですか？』
「マインツから？　もちろん、行かせてもらうよ」
『バス停の、すぐ近くに大型の魔獣が出たらしいです』

「わかった」
　エニグマをしまい、みんなに話を伝える。
　すぐに向かおう、ということになった。
「キーア、もうすこし出かけることになるけど……大丈夫か？」
「うん、へいき！」
「今度は私が一緒にいます」
　ティオが請け負って、魔獣退治は他の五人でやることにした。
　導力車で鉱山町マインツへと向かう。

　クロスベルの街を西日が赤く染めている。
　結局、ロイドたちが支援課ビルに戻ってこられた頃には、もう夕方になっていた。
「ふぅ……今日はいつにも増して忙しかったな……」
「本当ね」
　ロイドの疲れた声にエリィが苦笑した。



　ようやく、百貨店で買った物を開けられる。
　一足先に自室へ戻っていったランディが、紙袋を持って降りてきた。
「ちょいと出かけてくるわ」
「あ、そういえば、約束があったんだったな。時間、大丈夫か？」
「先輩、送りましょうか!?」
　ロイドとノエルに、ランディが手を横に振った。
「いや、そんなギリギリでもねえよ。ちょっと早いくらいだ」
「それならよかった」
「じゃあ、あたしは導力車を洗ってきますね。今日は、いろんなところを走ったから泥だらけになっちゃってるし」
「おう、そうしてやんな」
「フフ……余裕があるなら、シャワーくらい浴びて行ったらどうだい？　それとも、向こうで浴びるのかな？」
　くすくすと笑うワジに、ランディが肩をすくめる。
「そんなんじゃねえよ。もちろん、シャワーくらい浴びてくっての」
　ランディは紙袋を応接スペースにあるソファのうえに置くと、風呂場へと向かった。
　キーアがやってくる。

「ツァイト、今日ね、百貨店で首輪を買ってもらったんだよ！」
　紙袋を見せた。
「ウォン！」
　ツァイトが鳴く。
「えへへっ、かわいいんだよ～」
「グルル……ウォン！」
　はたはたとツァイトが尻尾を振った。
　そのとき、エリィが台所から声をかけてくる。
「ロイド、夕飯の準備をするのだけれど、ちょっと手伝ってもらっていいかしら？」
「ああ、もちろん」
「あ！　キーアも手伝う！」
「ほんと？　ありがとうキーアちゃん」
「うん！　えっと、ツァイト、ちょっと待っててね！」
「ウォン」
　かまわないから行くといい——といった様子でツァイトは伸びをすると、ふたたび丸くなって目を閉じた。
　キーアは応接スペースの机のうえに紙袋を置いて、台所へ。



　ほほえましく思いながらロイドも手伝いをしに顔を出す。
　こうして、ロイドとエリィとキーアは料理。
　ノエルは洗車。
　ワジとティオは自室に戻り、応接スペースには丸くなっているツァイトだけになった。
　シャワーを浴びたランディがやってくる。
「やべえな……思ったより時間かけちまった。待たせると、うるさいからなぁ」
　応接スペースの机のうえにあった紙袋を手に取り、彼は繁華街へと足を向けるのだった。

　夕飯のあと——
　キーアは応接スペースに置いておいた紙袋を手にして。
「ツァイト、今、つけてあげるね！」
「ウォン！　グルル……」
「あれ？」

使い終わった食器を台所に運んだロイドは、紙袋を手にして固まっているキーアを見かけた。
「どうしたんだい？」
「あ、ロイド……あのね、これなんだけど……」
「今日、買ってきた首輪だろう？　なにか問題があったのか？」
「ミシュラムって書いてあるみたいなんだけど……百貨店は違うよね？」
「とくに、ミシュラムには関係なかったと思うけど……」
手に取ると、たしかに首輪というには軽すぎる気がする。
そもそも、中に箱が入っている感じだ。
プレゼント包装はしてもらったが、こんな立派な包装ではなかった覚えがある。
ロイドは念のため紙袋をやぶかないようにして、開けてみることにした。
キーアが不安そうに見つめている。
中を確かめて、ロイドは息を呑んだ。
「これは……!?」
「な、なんだったの、ロイド!?」
「たぶん、ランディのだ！」
「あ……」
ただならぬ様子に、食器を洗っていたエリィとノエルがやってきた。



導力端末をいじっていたティオもだ。
ロイドの周りに、エリィ、ティオ、ノエル、キーアが集まる。
どうやら自分の役目はないと思ったのか、ツァイトは端のほうで寝そべった。
もう一度確かめてから、ロイドは結論づける。
「この紙袋は、ミシュラムの宝石店で使われていたものだと思う」
エリィが首をかしげる。
「ロイド、どうして、ミシュラムの宝石店の紙袋なんて知ってるのかしら？」
「えっ!?」
「……誰かに買ってあげたことがあるんでしょうか？」
ティオがジト目になっていた。
ノエルが首をかしげる。
「たしかに、不思議ですね？」
「……どうやら、ノエルさんではないようです」
「そうみたいね」
階段を下りてくる足音がした。
「なんだか騒がしいじゃない、どうしたんだい？」
「ああ、ワジ」

「ん？ 珍しいね、そんなふうに女の子に囲まれて……いや、君の場合、それほど珍しくもないのかな」
「べつに囲まれてるわけじゃ……」
しどろもどろにロイドが言う。つつっと女性陣が赤面して距離を取った。
「そうよ、べつにロイドを囲んでたわけじゃないのよ」
「……事件です」
「あ、そうなの。ロイドさんがミシュラムの宝石店の紙袋を知っていたという……」
ノエルの言葉をエリィが訂正する。
「そうじゃなくって。ランディが間違えてミシュラムで買ったプレゼントを置いて行っちゃったらしいのよ」
「首輪、持って行っちゃったの！」
キーアがつけ足した。
ため息まじりにロイドが頭をかく。
「途中で気づいてくれればよかったんだけど……もう一時間は経ってるからな」
「追いかけましょう！」
ノエルの提案に反対する者はいないが、エリィは表情を曇らせる。
「ランディがどこにいるか、わからないと」

「導力通信は試してみたかい？」
「あっ、そうか！」
ワジの問いに、ロイドはエニグマを取り出して、ランディに連絡してみる。
しばらく待ったが。
「………だめだ。もしかして、導力を切ってるのかもしれない」
ワジが首をひねる。
「デートだと、そういうシチュエーションもありそうだけど、ちょっと時間が早いかな。導力通信の届かないレストランの可能性が高いね」
「そういう店もあるのか」
「多くはないけどね」
待機中ならともかく、休暇のときであれば、通信が届くところにいなくても仕方がない。
ロイドは思案する。
「多くないといっても、全部の店を回っていたら、ランディがプレゼントを渡すのに間に合わないよな」
「うん……クロスベルで気合いの入ったデートをするなら、繁華街のレストランだと思うけど？」
「そういえば〝店を押さえておく〟と言っていたのが聞こえたな」

ティオが導力端末のところへ向かう。

「……つまり、ランディさんは繁華街の店を予約したということですね。高級レストランであれば、予約リストを導力端末で管理している可能性が高いです。ネットワーク側から調べてみましょう」

「そんなことができるのか⁉」

「……緊急事態ですから」

ティオは無表情なまま、ぽつりとつぶやいた。

端末のキーボードをマシンガンのように細い指が叩く。

画面を無数の情報が流れる。

やがて、レストランの一覧が出てきた。

「……ワジさん、このなかで可能性の高い店は、わかりますか？」

「もちろん。僕はこの街（クロスベル）の高級店ならすべて把握してるからね」

「……確率の高い順に当たっていきましょう」

「ああ。ここと、ここと、ここと……」

「該当ナシ……該当ナシ……該当ナシ……」

エリィが首をかしげる。

「うーん、本当にいいのかしら？」



ノエルは戦闘時のような真剣な表情をしている。

「ランディ先輩の緊急事態ですからね。それにミレイユ三尉もです」

「たしかに、デートで犬の首輪を渡されたら、ビックリするでしょうね」

「ビックリで済めばいいですけど、ショックだと思います」

「そうね。緊急事態だわ」

熱を帯びた支援課メンバーたちの様子を、応接スペースの隅で、キーアはツァイトの背をなでながら見守っていた。

「だいじょうぶかな？」

「グルル……」

「うん？　そうだね、すぐ首輪も戻ってくるね、ツァイト」

「ウォン！」

ティオの指が、タァンとキーを叩いた。

「ビンゴです……該当者アリ、予約は二名。場所は――」

クロスベル市繁華街、高級レストラン《プレミアム》三階。
清潔感のある白を基調とした店の中央には、小さな噴水がある。
優雅な音楽が奏でられ、精緻な意匠のテーブルには薔薇が飾られていた。
ため息をついて、ミレイユは窓の外を見る。
繁華街の煌めきのなかにアルカンシェル劇場が浮かんでいた。
「ふぅ……なんだか……物語の国に来たみたい」
「緊張しちまうか？」
「そうかも。いつもは、埃と硝煙にまみれてライフル抱えて走り回ってるもの」
「そーいうのも似合ってるが、今日の格好も悪くないぜ」
「ば、ばか。からかわないでよ」
文句を言いつつも、内心でヨシッと思ってしまうミレイユだった。
今日は、さんざん悩んだ結果――首もとの開いた水色のセーターワンピースを選んできた。
いつか使う日もあろう、と買っておいたものだが、いざ着てみると肩とか胸元が露出しすぎて抵抗があったので、青いスカーフを巻いている。
丈もちょっと短めだったので、グレーのタイツをはいていた。
そして、靴は無理してハイヒールにしてきたが。
歩きにくい。
山中行軍の訓練かと思う。
転んだら恥ずかしくて死んでしまいそう。
なんでもないタイル張りの道が、地雷原に変わる。
売り場の店員は、慣れれば大丈夫ですよ～と笑っていたが、装備に身体を合わせろ、ということか。警備隊では左利きでも右手で拳銃を扱うように矯正されるが、それと同じか。
「オシャレって訓練に似てるわよね」
「なに？」
「あ、いえ……それより、こんな高そうな店、大丈夫だったの？」
「心配すんなって、そこまで安月給じゃないからよ」
運ばれてきた料理は、どれも満足できる味つけだった。オードブルには魚の赤身と豆腐のお造り。
次は、ワイングラスに注がれた透明なスープ。
「繊細な味わいね」
「いいだろ？」
「野戦食とは大違いだわ」
「それと比べるのは、どうかと思うがな」
笹の葉でくるまれた鱈とホタテのバター蒸し。香ばしさに目眩がする。

「お、おいし～」
「はは……そうだろ？」
いつもは素直に言えないミレイユも、これには賛辞を惜しまなかった。
メインのパスタと肉料理も絶品だった。
食事がひとだんらくして、お互いの前にはデザートのプリンとグラスだけになる。
ランディが紙袋を差し出してきた。
「これ……話してた、ミシュラムの土産な」
「あ、うん」
「おや？」
差し出したランディが、怪訝な表情を浮かべた。
紙袋を見つめる。
「どうしたの？」
「あ……いや……なんかな……？」
「あの、あまり高い物だったら、私は……」
「いや！　そういうんじゃねえんだ。昇進祝いだと思って、受け取ってくれ」
「……うん。あ、あり、ありが……」
「蟻？」





「んんっ、そうじゃなくて！　その……ありがとう」
消えそうな声で言って、ミレイユは紙袋を受け取った。
開いてみる。
銀色に光っていた。
思ったよりも大きい。腕輪？　いや、もっと大きい。
もしかして、ベルトかも？　革でできているし。
でも、それにしては短い気がする。
いくらミレイユが引き締まっていても、これを腰に巻ける自信はない。
金属プレートに《POLICE DOG》と書かれていた。
「なっ⁉」
ミレイユは目を見開く。
――これ、首輪だ‼
しかも大型犬用。
ランディが頬をぽりぽりとかく。
「まぁ、趣味じゃねえかもしれないが……」
「あ……うん……」
こういう趣味は持ち合わせていないし、そう誤解されるようなことをした記憶もない。



ランディの趣味……なのだろうか？　その線はありそう。
あるいは、皮肉だろうか？
首輪。
犬。
飼い犬。
そう言われても仕方がないような事件があった。警備隊の人手不足から昇進したものの、ミレイユの心に重くのしかかっている失態。
昇進は、より責任ある立場で汚名返上せよ、という意味だと捉えてがんばっているけれど……ランディは、どう感じているのだろうか？
訊いたことがなかった。
あまり階級とか気にしない人だと思ったし。
あの事件については――ミレイユは被害者だとか、立場的に仕方なかった、気にするな、失敗したと思うなら取り戻すつもりで努力しろ――そうランディから言われたから。
信じていた。
彼が不安そうな顔をする。
「なあ、ミレイユ、どうした？　気に入らなかったら、無理しなくてもいいぞ？」
「わ、私……わからないの……」

「なにが？」

「頭のなか……ごちゃごちゃだわ。ランディのこと、ぜんぜん、わからなくて……」

「そ、そんなに⁉」

ランディが腰を浮かせた。

冗談を言っている様子はない。

なにか深い意味があるのだろうか？　ミレイユにはわからなかった。

「ほんとに……どういうことなのか……私……今日は、頭、冷やしたいから……」

席を立つ。

「おい、ミレイユ……どうして？」

「ごめんなさい。帰ってよく考えてみる」

「ちょっ……待てって！」

笑って「バカだな、冗談だっての！」なんて言ってくれれば、止まれたかもしれない。彼の真剣な表情に、逆に混乱は加速してしまった。

逃げるように店の外へと走る。

ハイヒールのせいで足元が不安定だったけれど、これ以上ランディの前にいると、言いたくないことまで言ってしまいそうだった。

エレベーターを待つのももどかしく、階段を使って駆けおりる。



ビルを飛び出し、繁華街を抜けて。

気がつけば、バス停も通り過ぎていた。

「……西の街道だ」

ミレイユはつぶやいた。街灯もない西クロスベル街道を歩いていく。

もう市外だから魔獣が徘徊しているはずだった。

装備はなにもない。

手にしているのは首輪の入った紙袋だけ。

それと、小さなハンドバッグ。中には最低限の化粧道具とハンカチくらい。

小型の導力銃すら入っていなかった。こんなふうに帰るなんて思ってもみなかったから。

結局、ランディは追いかけてこなかった。

からかわれたのだろうか？

ひどいなあ、と思う。

もしかしたら、ミレイユのほうがいつもみたいに怒って返したらよかったのだろうか？

あるいは、なにか前向きな意味があるのだろうか？　それくらいは訊いてみればよかったかも……

頭に血がのぼってしまって冷静な判断が下せなかった。

今からでも戻ったほうが？
真っ暗ななかで、がくん、と足元が滑った。
そんなに足場が悪かったかしら、と視線を落とす。靴のヒールが妙な角度になっていた。
「あうっ⁉」
「これ……折れてる？」
舗装された道をしずしずと歩くためのオシャレな靴だ。
警備隊員であるミレイユが全力で悪路を走ったら、壊れるのも無理はない。
「……買ったばっかりなのに……ほんとに、私って……女らしくないなぁ」
ずっと耐えてきたのに、とうとう目元が熱くなった。

ロイドたちは高級レストラン《プレミアム》を訪れた。
ここをランディが予約していたことは、ティオの調べで判っている。
繁華街の一角にある細長いビルだ。その玄関前に、ノエルは導力車を停めていた。
着いたとき、ちょうどミレイユが走り去っていくのが見えた。



それからしばらくして――
ランディが出てくる。焦った様子で周りを見渡した。
ロイドは駆け寄る。
名前を呼んだ。
「ん？　あれ、ロイドじゃねえか。どうしたんだ、こんなところで？」
「すまない、遅くなった！」
「なんの話だ？　悪いんだが、今、ちょっとばかり急いでてよ……」
「これだろ？」
ロイドは紙袋を出した。
ランディが目をしばたたく。
「あれ？　その紙袋は……どういうことだ？」
「実は、ランディが持っていったのは、俺が百貨店で買ったツァイトの首輪だったんだよ！」
「おいおい、マジかよ⁉」
飛び上がる勢いだった。
無理もない。
「ソファのうえに置いただろ？　それなのに、机のうえにあった紙袋を持って行ったんだ」
「うげ⁉　しまった……そういうことだったのかよ！」

「ミレイユ三尉、怒らせたのか？」
「怒らせたというか、泣かせたというか……まぁ、ようやく急に帰った意味がわかったぜ」
「たぶん、タングラム門に向かったんだと思う。ここに到着したとき見かけたから、ワジに追ってもらってるんだ」
　ロイドはエニグマを取り出した。
「…………」
『やあ、そろそろ連絡が来る頃だと思ってたよ』
「ミレイユ三尉は？」
『西クロスベル街道だよ。そろそろ橋を渡るところさ。女性のひとり歩きには向かない場所だし、早く来たほうがいいんじゃない？』
　ロイドはランディのほうを見る。
　彼はうなずいた。
「ああ、聞こえたぜ。いろいろ、ありがとうよ！」
　駆けだした彼のほうへ、ノエルが導力車から声をかける。
「ランディ先輩、送りますよ⁉」
「サンキュ！　でもここまでしてもらって追いかけるのまで人任せじゃ情けねえ。これ以上、あいつに格好悪いとこ見せたくないんでな。気持ちだけもらっとく！」

「あ……了解です！」
　ノエルは導力車のなかで警備隊式の敬礼をして、ランディも軽く右手をかざして返した。
　左手には、今度こそプレゼントの紙袋を持っている。
　走り去るランディを見て、ティオが目を丸くした。
「……ランディさん……速いです。もしかして、シルフィードの魔法（アーツ）？」
　エリィが首を横に。
「いつも大きくて重たいスタンハルバードを持っているから遅く見えるだけじゃないかしら？　私も鍛えているつもりだけど、あれは持つだけでも、けっこう大変だと思うわ」
「なるほど……さすがは元警備隊です」
　ティオが感心している間に、赤毛の青年の姿は繁華街から消えていた。
　ロイドのエニグマから、ワジの声が聞こえてくる。
『やれやれ……もう、お役ご免かな？』
「そうみたいだな。あの調子なら、すぐ追いつくだろう」
『せっかく外に出てきたし、僕は夜遊びして帰るよ。ロイドも行くかい？』
「はは、やめておくよ」
『振られちゃったか。仕方ない、また今度だね。おやすみ、ロイド』
　そう言って、ワジからの通信は切れた。

きっと朝方に帰ってきて、朝食のときには平然とした顔をしているだろう。
ロイドはエリィとティオと、導力車へ乗りこむ。ノエルが導力エンジンのスイッチを入れた。
「もう出しちゃっていいんですか？　ワジ君は？」
「ワジは寄り道して帰るそうだ」
「まったく、仕方のない人ね」
「……戻りましょう、キーアが待っています」
「はい、そうしましょう！」

ひたひた、と夜の橋のうえをミレイユは歩く。
結局、片方だけハイヒールだと歩きにくいので、両方とも脱いでしまった。
壊れた靴をぶらぶらさせて。
この調子だとタングラム門につくのは朝方かもね、などと思いながら。
ヴゥゥゥン……
「え？」



夜闇のなか、ぞわりと背筋を冷たくする羽音がした。
ぬめりとした体が空中で、月の光に反射する。
赤い目玉が光った。
蠅のような頭と蜂のような胴体。耳障りな羽音をまき散らして向かってくる。
尾についた槍の穂先のような針が、ミレイユのほうを向いていた。
「くっ⁉　ブラックハンター⁉」
普段の装備ならば、まったく問題にしない相手だが、今は武器がない。
素手でも負けるとは思わないが、あの魔獣は毒を持っているのだ！
今日は戦術オーブメントを持ってきていない。魔法による回復はできない。かすっただけでも、大変なことになる！
「攻撃を受けるわけにはいかない……‼」
身構えたミレイユに、魔獣が襲いかかってきた。頭上から羽音が迫る。
――躱して、反撃を叩きこむ‼
身を低くして避けたところまではよかったが、左足に鋭い痛みが走った。
「痛ッ⁉」
踏みこんだときに、尖った石かなにかを踏んだらしい。
素足での戦いが、これほど難しいなんて。

こんな有様では戦えない。
羽音が再び頭上から迫ってくる。
「ううぅ……」
「──マグナブレイズ‼」
暗闇のなかで声がした。直後、羽虫の形をした魔獣の周囲に赤々と輝く炎が集まって。
爆発した。
ズゥン！ と空気を震わせる衝撃。
魔獣が消え去る。
一瞬だけ照らされた橋の先に、赤毛の青年の姿があった。
月明かりだけの夜闇に戻る。
もう羽音はしなかった。
こつ、こつ、と足音が近づいてくる。
「すまなかったな、待たせちまって。ケガはないか？」
「……ないわよ、あんなの相手に」
「左足を痛めなかったか？」
「見てたわけ⁉」
「エニグマの駆動中だったんでな。俺も武器を持ってきてなかったし、相手は飛んでたからな」
「そうね……妥当な判断かも。まぁ、その、助かったわ……それで、なにしに来たのよ？ こんなところまで」
「間違ったことを謝りに。あと、ちゃんとしたほうを渡しにな」
「え？」
わずかな月明かりのなか、ランディが紙袋を差し出す。
「こっちが、本当の昇進祝いだ。さっき渡したやつは……支援課ビルを出るときに間違えて持ってきちまったらしい」
「ま、間違えて⁉」
「ツァイトのためにキー坊がねだって、ロイドが買ってきたんだと」
名前だけは、前にランディから聞いたことがあった。
「たしか、警察犬よね、ツァイトって」
「そういや、見たことなかったか？ なんにしても、犬用の首輪なんかプレゼントするわけないだろ。変だと思わなかったのか？」
「そりゃ……思ったわよ！」
「言ってくれりゃ、その場で謝って済んだのによ」
「でも、これは、あのとき……自分で判断できなかったことへの皮肉なのかと思って」
警備隊の上層部に不信感を持っていても、与えられたものが何であるか判断することなく、

ただ命令を聞いてしまった。その結果、自分は大きな過ちを犯したと思う。
　ランディが肩を落とした。
「はぁ～～～、俺がそんな回りくどい性格かっての。下らない皮肉のために首輪まで用意するかよ」
「も、もしくは、変な趣味でもあるのかと……」
「ない！　おまえは俺を誤解している！　俺はいたって健全な色男なんだからな！」
「……うん」
「あ～いや、色男ってところは、笑っていいんだぞ？」
「え？　あは……なによ、いつも自分で言ってるくせに！　えっと……それじゃあ、返すわね」
　ずっと握りしめていた首輪入りの紙袋を返す。
　そして、改めてランディからプレゼントを受け取った。
「……あ……あり……」
「お礼を言うのは、見てからにしてくれや」
「そうする」
　紙袋を開く。
　夜の暗闇のなかでは黒色に見えるが、おそらくは藍色をした宝石箱だろう。
「あ、開けるわね」

「おう」
　おそるおそる開いた。
　月明かりに照らされて、銀色に輝く。
　それは、素敵なブローチだった。
　中央に緑色の宝石がはまっていて、夜空の星をもらったかのよう。
「これ……私に……？」
「さすがに、これで間違ってたら、俺はウルスラ病院で看てもらってくるぜ」
「あはっ」
　先ほどまでの暗い気持ちが、一気に吹き飛んでいた。
　じめじめして、不気味だった夜の街道が、ロマンチックにさえ思える。
「あはは……やだ、そんな……いいの？　本当に？　もう返さないわよ？」
「そんなに気に入ったか」
「えっ!?　あ、いえ、そ、そういうわけじゃ……せっかく選んでくれたから受け取るのよ。そ、それだけなんだからね!?」
「おう、無くしたりすんなよ」
「子どもじゃないんだから大丈夫よ」
　たしかに、つけていたら、壊したり、なくしたりしそうだ。

　自分は、そういうところがある。
　凝った意匠で綺麗だけれど、階級章のように金属の板というわけではない。あまり頑丈ではないだろう。
　いざというときだけ使うようにして、大切にしまっておこう、と思う。
「……いざというときが……あるといいけどなぁ」
「ん？　どうした？」
「あ、いえ、なんでもないの」
「ふぅ～、とにかく、市内のほうへ戻ろうぜ。ここからタングラム門じゃ遠すぎるし。途中のバス停までだって、かなりの距離だ」
「うん」
「百貨店の靴屋に行くか？　まだやってるはずだし」
「そうね。はだしで帰ったら、なにがあったかと驚かれちゃいそう」
「よし、市内まで背負ってやるよ」
「えっ!?　へ、へいきよ！」
「無理するなって、こんな石だらけのとこ、危ねえ」
「だいじょ……あっ!?」
　また左足に痛みを感じて、ミレイユはバランスを崩した。



　こんどは伸びてきた手に支えられる。
　抱きとめられて。
　すぐ目の前に、ランディの顔があった。
　心臓の鼓動が加速する。
「あ、あの……」
「なんだ？」
　夜の鉄橋を風が吹き抜けていった。
「……ありがとう」



# 月刊FALCOM MAGAZINE Vol. 184


| | |
|---|---|
| 発行人 | 田中一寿 |
| 発行協力 | 日本ファルコム株式会社 |
| 編集 | 小渕智幸<br>河野崇 |
| デザイン・DTP | 株式会社 ACQUA |
| 表紙ロゴデザイン | 荻窪裕司（デザインクロッパー） |
| 発行 | 株式会社フィールドワイ<br>〒 101-0062<br>東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F<br>TEL 03-5282-2211（代表）<br>http://www.field-y.co.jp/ |




# FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

## 『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

**ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/**

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.184プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『空の軌跡 the 2nd』新キャラクターの印象は？
　アンケート②『東京ザナドゥ』はプレイしたことがありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

### 記事一覧



**応募締め切り　6月26日（金）**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。